

征服者の聖母から平和の聖母へ

——ラ・コンキスタドーラの遍歴——

加 藤 薫

一九九六年四月から八月まで調査研究のために過ごしたアメリカ合衆国ニューメキシコ州の研究所から自宅宛てに送付した荷物を整理している時のこと、未整理の書類をランダムに詰め込んだ箱の中から全く記憶にないレターサイズ一枚の印刷物が出てきた。左肩隅にキャンドルスティック型(図一)の聖母イメージをイラスト化した単色印刷の配布物だが、どこでどうやって手にいれたのか思いだせない。レターヘッドには『ラ・コンキスタドーラ…アメリカ最古のマドンナ、平和の聖母』の信心会入会申込書、聖フランシス大聖堂、サンタ・フェ・ニューメキシコ」と印刷されている。おそらく写真撮影のため、メキシコ州の州都であるサンタ・フェ市にあるサン・フランシス大聖堂を訪れた折りに誰かに渡されたか、無意識に収集したものと思われる。年会費二ドルで全てのミサに無料参加できる……などといった会員特権を謳った文章を読んでいくうちに、手書きの書き込みがあるのに気がついた。英文字体からして筆者のものでな

いことは明らかで「全ての人々に勝利をもたらす至高の愛の聖母、ロサリオの聖母、平和の……(二単語解読不能)」と書かれている。おそらく観光ツアー客が手渡されたこの用紙に案内人の説明をメモ書きし、それを置き忘れたか案内人に返したものが回り巡って筆者の手に渡ったということだろうか。何かの縁で結ばれたような気にかかる一枚の用紙に誘われて今回はラ・コンキスタドーラの辿ったその数奇な運命の奇跡を辿ってみよう。

聖フランシスコ修道会の布教活動

十六世紀中期まで新大陸における布教活動はもっぱら修道会組織の手に委ねられていた。これは西欧におけるキリスト教布教の歴史の中ではありえないことだった。西欧での既得権を奪われ、半世紀に渡って新大陸で着々と布教実績を挙げる修道会組織に嫉妬し、その権利を奪回するためあらゆる政治的圧力をかけてきた世俗教会組織の努力は一五六〇年代になってようやく実を結び、一

五七二年に信者への秘跡や日常のミサなどの宗教サービスは全て世俗教会組織に返還することをスペイン国王が承認し、一五八〇年代には布教の実権は全て世俗教会組織に移管する。ここにきて名目的には一五三〇年代に確立していた司教区制度がようやく本格的に機能するようになったといえるし、建築史的に見れば、修道院やミッシェン建設の時代から司教座を置くための大聖堂建設時代への移行、そして新たに司教区の中で分割される小教区毎に建設されるパロッキア（教区教会堂）の時代の到来ということになる。

それまでかなりの資金と人員を投入し、布教実績を上げてきた聖フランシスコ修道会、聖ドミニコ修道会、聖アグステイン修道会といった三大修道会組織始めとする諸修道会組織は決断を迫られた。新大陸から完全撤退するか、新大陸に留まるにしても新たな布教の場と対象を捜すか、未発掘の布教市場を掘り起こすか、規模を縮小し西欧伝統の修道院自己完結型の生活を維持してゆくかである。例えば一五七二年と他の修道会組織に比べかなり後になってやってきたイエズス修道会の戦略は都市部で増えてきたメステイソン（白人と先住民の混血）を主たる対象とした教育の普及を図るというもので、コレット才建設などに力を注いだ。聖フランシスコ修道会は過去に蓄積した先住民への布教のノウハウを活かす方針で、

一五七三年のスペイン国王の勅令で植民地化事業が承認されたにもかかわらず実際にまだ未踏の土地として残されたヌエバ・エスパニーヤ領（メキシコ）北部辺境地域への布教及びミッシェン建設に活動の中心を移し、カリフォルニアからフロリダまでの植民地化事業を実質的に支配するに至った。（注一）

本論で扱うヌエボ・メヒコ（現アメリカ合衆国ニューメキシコ州）地域で実際に聖フランシスコ修道会のミッシェン活動が開始されたのは一五九八年からのことであり、一六〇九年にまず独立した布教区域として承認された後、さらに一六一六年には公式の小管区に認定された。ちなみに裁判権から人事、予算などを統轄するデュランゴ大管区が設定されたのは一六二〇年のことで、この下にニューメキシコやアリゾナの小管区が属することとなった。しかしこの組織としての整備以前から布教活動が実施されていたことはいうまでもない。一六一六年の小管区昇格と共にスペインでは新たにニューメキシコでの布教事業に貢献する聖フランシスコ修道会士の募集が継続的に行われるようになるが、それ以前の一六一〇年にはすでに九人の聖フランシスコ修道会士が活動しており、布教本部はサント・ドミンゴ・ブエプロに設立されたミッシェンに置かれていた。そしてここにニューメキシコにおける聖フランシスコ修道会の活動の記録や資料が全て

収集、保管された。一六一一年にはメキシコ市から八人の修道士が到着し、一六一六年までには十か所のミッシェン・センターと四か所のビジタ（教会堂などの宗教施設は建造されていないが定期的に修道士が訪問し改宗事業と改宗者への宗教サービスを行う共同体）が設置され、推計約一万人の先住民の指導にあたっていた。一六一六年にはさらに七人の修道士が応援にかけつけた。この年の小管区昇格と共に一六一〇年から布教活動にあたっていたエステバン・デ・ペルラが暫定ながら初代管区長に任命され一六二五年までその任にあたる。一六二一年にはさらに六人の修道士が到着し、布教地の数もその範囲も広がった。一六五六年時の修道士総数は四六名に達し、ようやく当時の先住民プエブロ総数と同じになった。

（注2）

残念ながら一六八〇年に勃発したいわゆる「プエブロの反乱」の際にサント・ドミンゴ始め各ミッシェンに常駐していたフランシスコ修道会士は殺害され、ミッシェンも破壊された。一六九二年のスペイン軍による再征服の翌年この地を最初に訪れた聖フランシスコ修道会士の報告でも資料は全て焼失していたと記録されている。しかし一七七六年にニューメキシコにおける全教会施設の詳細な財産目録作成、在庫調査の任にあたったドミンゲス神父がまとめた有名な「ドミンゲス報告書」には、一

六一六年から一七七六年までの資料が六個の包みに保存され、その中の一六八〇年以前の資料としては洗礼者名を時系列に沿って書き込んでいった十冊の綴じられた記録帳、そして埋葬者名をメモした綴じられていない状態の紙束の山があったとも述べているので、何らかの理由で焼失を免れた資料もあったのだろう。いずれにしてもプエブロの反乱はかなり大掛かりかつ徹底したものであり、一六八〇年以前にスペイン人によって建設された建造物や生活資本、文献資料などほとんど破壊されたため、十八世紀以前のニューメキシコにおける植民地活動や布教活動の実態は物的証拠を欠く中でメキシコ市やスペインに残された文献中心に進めねばならないという限界がある。本論で対象とするラ・コンキスタドーラはこの状況のなかで戦火を逃れ存続することのできた稀有な物証でもあるのだ。（注3）

アロンソ・デ・ベナビデスと被昇天の聖母像

一六二五年のことデュランゴ大管区の承認を得て、メキシコ市からニューメキシコの管区長としてアロンソ・デ・ベナビデスが正式に赴任することとなった。ベナビデスはカストス、すなわち事務総長とでもいうべきニューメキシコにおける聖フランシスコ修道会の予算管理から修道士の手当などまで含む出費の承認、備品、消耗品に

いたる財産管理と記録といった業務一切と、コミッサリオすなわち異端審問審査の監査役兼最高判事として勤める権限を与えられていた。手短かに言えば、ニューメキシコにおける宗教的権威の頂点に君臨すべく着任したということである。一六〇九年にスペイン国王はその東西北の境界が定かでないにもかかわらずニューメキシコの正式領土化を決定し、ヌエバ・エスパーニャ副王領の一部として組みこんだ。しかしメキシコ市から直線で約二四〇〇キロも離れた辺境の地の行政にはほとんど無関心だったといつてよい状態が続く。サンタ・フェとメキシコ市を結ぶコミュニケーションと物資補給のルートとしてカミノ・レアル（国王の道）がほとんど開設されたが、公式キャラバンは三年に一回だけであった。（図二）このスケジュールも一六二〇代は遅れがちで四年に一回というペースになっていた。メキシコ市を出発してサカテカスまで向かい、そこからヌエバ・ビスカヤの鉱山フロンティアであるサンタ・バルバラを通ってさらに北のチワワに向かう。ここからリオ・デル・ノルテ（現在のリオ・グランデ川）に近い旧エル・パソ（現在のメキシコ領フアレレス市）まで北上した後、やっとニューメキシコ領に入り、さらに北のサンタ・フェまで向かうというルートだが、通常は片道六か月の行程であった。真夏以前にメキシコ市を出発し、晩秋までにサンタ・バルバラに着

き、十二月末か一月上旬にサンタ・フェに到着というのが気候の変化や安全対策を考えると理想だったが、最低十二名と決められた護衛兵士のサポータージュやポーター役として雇う百人単位の先住民との待遇を巡るトラブル、これとは別の狩猟移動生活をおくる先住民部族の襲撃などで日程は常に遅れた。（注4）

話は大方それでしまった。一六二〇年代のサンタ・フェ向けキャラバンが動いたのは一六二一年、一六二五年、それに一六二九年の三回のみであり、この記録が正確ならばベナビデスがサンタ・フェに到着したのは一六二五年末であった。（注5）ベナビデスが赴任にあたつて十一人のフランススコ修道会士も新たに連れてきたことは判っている。またどのような荷物を持ち込んだかはメキシコ市の国立古文書館に保存されているカミノ・レアル・キャラバンの荷物リスト（注6）と、ベナビデス自身が赴任の準備段階から一六二九年の離任までの記録を報告書という形でまとめ、スペイン国王フェリペ四世宛てに提出した「メモリアル」という文書、それ一六三四年に改めてローマ法皇ウルバヌス八世に提出するため書き直した報告書からはほぼ全容がわかるが、データを対峙させてみると記述の不一致はかなりある。（注7）ディッキーのまとめによると、ベナビデスの荷物のために四十五本の木箱が使われ、そのうち鉄の錠前付きチェ

ストが五箱、錫板で外側を補強した宗教儀式用聖器を納めた箱が十一個、その他に鋤など鉄製の農耕道具が十二本あったという。宗教美術品としてはキリスト教主題を描いた五点のキャンバス油彩画があり、各フレームのサイズは二・二メートル×一・八メートルに統一されており、運搬時にはキャンバス絵をフレームからはずし、まとめてロール状にしていたという。彫刻品では二体の木製キリストの十字架磔刑像があり、どちらも高さは一・四メートルであったという。(注8) この彫像規格はスペインから船載する立体物の最大高制限とも合致している。しかし絵画の方は大き過ぎるためこちらにはメキシコ市で制作されたものだろう。いずれにしてもブエノスの反乱のため残存しているものはない。

さて現在までラ・コンキスタドーラを安置する専用の礼拝堂をもつ聖フランシス大聖堂の公式ガイド(注9)によると、このラ・コンキスタドーラは一六二五年のクリスマス直前に到着したベナビデスによって、現在の大聖堂が建っている場所にかつて存在していたという被昇天の聖母を奉じる教区教会堂(パロッキア)に奉獻され、同教会堂の本体として安置する祝福のミサがとりおこなわれたという。この記述を言葉通り受け止めれば、ベナビデスが遠路はるばるメキシコ市から運んで来たもののようにだ。しかしベナビデスの荷物リストにはこの「被昇

天の」聖母像と完全に対応する記述がみられない。ただ「無原罪のお宿り」の聖母に関する記述があるのでこれが根拠となっているようだ。ラ・コンキスタドーラは木製彩色の中空像で高さは約五〇センチメートルという典型的なプロセッションの儀式用聖母彫像であり、当然リストには明記されてしかるべきものだが、後述する先住民の奇跡物語との関連であえて伏せておく必要があったのかも知れない。(注10) 現在もサンテラ(女流聖像彫刻作家)として活躍するマリ・ロメロ・キャッシュは、その著作(注11)の中でこの聖母像は一六〇〇年代以降、ベナビデスの到着以前にすでにスペイン人民間植民者の手によってニューメキシコに運ばれてきたものと推察しているし、またニューメキシコにおけるヒスパニック・アート研究では第一人者であった故E・ボイド博士の研究でもラ・コンキスタドーラとベナビデスの関係については断定的な発言を留保している。(注12) 聖フランシス大聖堂の公式ガイドが根拠としているのは、フランシスコ修道会士であり、ニューメキシコの布教史や植民地時代のヒスパニック社会史に関する文献調査に生涯を捧げ、論文著作も多数あるアンヘリコ・チャベス神父のラ・コンキスタドーラに関する調査結果である。(注13) 筆者のような一民間人では不可能な聖像本体への直接調査やフランシスコ修道会所蔵の文献に容易にアクセスできる

ことなどのメリットを生かし、その上に解釈よりもデータ重視の論法を採用しているため、アカデミックにもかなり信頼度は高い。但しラ・コンキスタドーラの起源にかなする論述に限っていえば、典拠とするフランシスコ修道会の内部資料の再検証が外部の人間にはほとんど不可能であるとはいかんともしがたい。また筆者は第二次世界大戦終了直後に出版されたラ・コンキスタドーラに関するチャベス神父の最初の論文も大学図書館では紛失のために見ることはなかった。つけ加えれば、この聖母像がスペイン制作のものかヌエバ・エスパーニャ制作のものであるかについての議論ではすでに決着がついている。詳細な議論を省略して結論だけ言えば、素材、表現様式からいって一七世紀前半にスペインで制作されたものであり、図像学的にも同時期スペイン本国の大衆レベルで圧倒的に人気のあった「無原罪のお宿りの聖母」である。

サンタ・フェの植民者社会

ラ・コンキスタドーラがニューメキシコの首都サンタ・フェに到着するまでの歴史を整理してみると、スペインで「無原罪のお宿りの聖母」像として制作されたプロセッシオン用の彫像がベナビデスの赴任に合わせてメキシコ市に輸出された。ベナビデスはニューメキシコに向けて

出発するまではオリジナルな属性通り「無原罪の聖母」像としてリストに掲載したが、サンタ・フェに到着した一六二五年のクリスマス直前に安置する最適の場所としてはまだ主守護聖人像のなかった「被昇天の聖母教区教会堂」しかなく、このパロッキオの主聖母像を求める信者の希望もあつて「被昇天の聖母」に属性を変えてしまったものと思われる。ここで「被昇天の聖母」を求めた十七世紀前半のサンタ・フェのヒスパニック社会を構成した植民者たちの精神生活についてもふれてみよう。

一五九八年にフアン・デ・オニャーテの遠征隊が現在のエスパニョーラ近郊にニューメキシコ最初の暫定的首都サン・フアン・デ・ロス・カバリエロスを建設した時、植民者や兵士合わせて二五〇名以上の男性がいた。それがペドロ・デ・ペラルタがあらためて現在のサンタ・フェに首都を移した一六一〇年までに残っていたのは約五〇人でこの中には十六人の職業兵士と六人の修道士、二名の助祭士が含まれていた。一六一七年になつてもサンタ・フェに常駐する植民者と兵士の男性合計は四八人だった。一六二〇年になつてもニューメキシコ領域における都市空間を持つ共同体は唯一サンタ・フェだけといつてよく、それでもその植民者世帯主数は五〇人台前後であった。一六三四年にベナビデスが法皇ウルバヌス八世宛てに提出した報告書では赴任時のサンタ・フェの世帯数は二五

○以上としていた。これは反証のデータがあるわけではないがいかにも多過ぎる気がする。ちなみに一六六〇年になって始めて世帯数が百を越えたと推察されるが、いずれにしても十七世紀の人口動態、国勢調査の資料は一六八〇年に発生したプエブロの反乱のために消失しており、随時メキシコ市に送られてきた行政担当者や聖職者の手紙、報告書類が唯一手がかりとなるものである。

ロサリオの聖母信仰

ファン・デ・オニャーテの遠征以来、ニューメキシコの守護聖人としては「救済の聖母」(Nuestra Señora de los Remedios)が一般的につかわれてきた。(注15)軍の行進や戦闘の際にキリストの下僕として働き、加護を願う目的でこの聖母像はよく使われた。一方スペイン出身のキリスト教徒であるという個人的なアイデンティティーと密接な聖母イメージはロサリオの聖母(Nuestra Señora del Rosario)であり、一四七五年にケルンでロサリオの信心会が結成されて以来スペインにもロサリオの聖母信仰は特に大衆レベルで普及し、また一五七一年に発生したオスマン・トルコ海軍とスペイン、ベネチア、ローマ法皇庁連合艦隊の間で戦われたレパントの海戦での連合軍圧勝を記念して法皇ピウス五世が開戦日であった十月七日をロサリオの聖母の祝祭日に制定してか

らは、勇猛かつ勇敢で戦闘能力の高いスペイン軍のイメージとロサリオの聖母の加護が裏腹な関係にあると認識するようにになった。しかし聖ドミニコ修道会ならいざしらず、聖フランシスコ修道会が支配し、また別の信心会加入者もいるニューメキシコの新規植民者社会ではより普遍的な別の聖母イメージが求められたと推察される。十七世紀のスペインで最もポピュラーな聖母イメージは「無原罪のお宿り」(Inmaculada Concepción)であった。聖母の神性を主張するため、マリアは原罪を免れて地上に降臨するという教理は十世紀頃までに西欧中で一般化し、十五世紀になって聖フランシスコ修道会の強烈な支持を背景に確立した。十七世紀に定義された図像表現の規範では、まずマリアは十二、三歳の少女(といっても日本人の感覚からすれば十分成熟した女性)で、白い足下まで覆う長衣の上に青いマントをはおり、両手は合掌するか胸の上で交差させる。全体は下弦の月(時に太陽)に乗り静かに降臨してくるが、片足は悪を象徴する恐ろしい形相の竜か蛇をおさえこんでいるのが普通である。頭の周辺には十二使徒を象徴する十二の星を鏤め、腰にはフランシスコ修道会の象徴となるひも状の帯を巻き結び目は三つ、と決められていた。この図像は結果として十三世紀頃からビザンチン美術経由で西欧にも普及した「被昇天の聖母」とかなり類似した表象をもってい

る。「被昇天」主題でも聖母は三日月の上に立ち、額の回りには十二の星が輝く。天空には天使群や父なる神の姿が見え、また聖母に攻撃を加える悪魔の象徴が出てくる。かたや降下でかたや天への上昇を示しているわけだが、図像の上でどちらの方向へ向かうのか区別するのは難しい。このため「無原罪のお宿り」では天の父なる神が何らかの形で「汝に原罪なし」といったメッセージを送っている様子を挿入したりする。一方「被昇天の聖母」では十七世紀以降になるとマリアが天を見上げたり、腕をのびしているポーズで表現するなど工夫するようになった。しかし絵画では図像の差別化も比較的容易だが、彫像でとなるとかなり困難であり、現実にはかなり混同されたことと思う。(注16) いずれにせよその属性がどのようなものであれ、このベナビデスが持ち込んだとされる聖母像は小規模ながらも「ニューメキシコの植民地帝国」を築いた植民者の第一世代の人たちには熱狂的に受け入れられた。タイミング的に待ち望まれたものだったからである。というのも一六二〇年代のニューメキシコではある聖母の奇跡の噂が流布しており、世帯主五人前後という小さなサンタ・フェのスペイン人植民者社会ではおそらく全員がこの噂話をしていたはずで、この奇跡の話に対応した、先住民も礼拝することのできる具体的な聖母イメージを渴望していたのだ。

青いマントを着た聖母の奇跡(注17)

一六二〇年代、いやそれ以前から先住民の間で流布していたニューメキシコの聖母伝説には「聖フランシスコの貧しき尼僧」教団に属していた二人の尼僧のイメージがダブって伝えられている。可能な限り整理してみると次のようなことだ。まずスペインのカリオン・デ・コンデス修道院にルイサ・デ・カリオン(一五六五―一六三六)という尼僧が勤めていた。伝説では神への祈りを捧げている時、彼女の手にキリストの受難の印である傷跡が突然顕れたという。それ以来ルイサは生きた聖女として話題になり、ルイサの名前や肖像の入った画像や宗教オブジェが流布した。一六二〇年代にその名声は最高潮に達したが、この前後の時代にニューメキシコに赴任してきたフランシスコ修道会士達もかなりの数のルイサのイメージ品をもちこんできたようだ。さて一六二〇年代にデイエゴ・ロベスという修道士が、現在のニューメキシコ州東部からテキサス州中西部一帯の平原をテリトリイとしていた先住民部族フマノ人を対象に布教活動をおこなっていた時、偶然にこのルイサ・デ・カリオンの画像を見せた所、彼女なら何回もフマノ人の部落に姿をあらわしていた、という反応が返ってきた。同じような体験は一六二六年にフアン・デ・サラス修道士がニューメキシコ北部のサリナス山岳地域にすむ先住民へ布教してい

る時にもあった。さらにほぼ同時期に現在のアルバカーキ市のすぐ南にあったイスレッタ・プエブロでミッシェン建設活動をしていたフランシスコ修道会士の所に前述のフマノ人男性が約五〇人も突然に現れ、すぐに洗礼をほどこしてくれと頼んだ。理由を聞くと夢の中に女性が現れ、流暢な先住民の言葉でやさしく、すぐに洗礼を受けなさいと勧めたということだった。夢からさめるとそこには猟もしていないのに動物の肉が置かれていたともいう。修道士がその女性の姿形を聞き出すと聖女ルイサのイメージに近かった。しかし唯一大きくくいちがったのは聖女は若く二〇代前後だったということである。実在の聖女ルイサはすでに五〇歳代であり、当時の平均寿命も大きく越えた高齢者だったからだ。任期を終えてスペインに戻ったベナビデスが一九三一年に当時のカステイリーヤ王国北端をながれるエプロ川岸にあったアグレダの尼僧院を訪れた時、マリア・デ・ヘスース（一六〇二～一六六五）という尼僧が応対した。その時二十九歳だったマリア・デ・ヘスースの姿勢好は聖女ルイサ・デ・カリオンのものと全く同じだった。そして驚くべきことに彼女の魂はベナビデスと会う十一年前から天使の助けで何度も北米地域を訪れ、フマノやアパッチなど先住民の間で彼らの言葉を使って布教していたという。聖女ルイサも聖女マリア・デ・ヘスース・デ・アグレダも聖フ

ランシスコ修道会の尼僧のユニフォームであるグレイの長衣、純白の頭覆い、それに青色のマントをきていた。英語風に言うレディー・イン・ブルの伝説を研究したウエーバーによると、最も早い例はスペイン人が一五七三年にフロリダ半島で布教活動を始めたその十年前にすでに青いマントを着た聖女の訪問があったと述べている。まだ聖女ルイサも生まれていない時代なのでそうするとまだルイサ以前に魂だけが北米を訪れた聖フランシスコ修道会所属の尼僧が最低もう一人はいたことになるわけだが、この早い時期の話はルイサ・デ・カリオンの登場した時代を遡って伝説化された話とも考えられる。

先住民の間の伝承によればレディー・イン・ブル（青いマントを着た聖母）は病気を癒し、作物に雨と実りをもたらし、狩猟では肉の確保を保証してくれたという。

先住民とスペイン人の両方に恩恵をもたらす聖母というイメージは、ヌエバ・エスパーニャにおける褐色の肌をした聖母ガダルーペの存在とかなり重なりあつて見えるのだが、言葉を変えれば聖母ガダルーペのニューメキシコ版が青いマントを着た聖母ということになるだろう。いずれにしてもサンタ・フェの住民達のみならず先住民の間でも聖母ガダルーペのイメージに匹敵する自分たちの聖母像、すなわち普遍的な天上の聖母ではなくニューメキシコ個々の女王を熱望していたことは感じ取れる。

そこにちょうどタイミングよくベナビデスが聖母像（おそらく被昇天の聖母像ということ）で白の長衣の上に青いマントをきせていたと思うが衣装は数年毎に新調されてきたのでオリジナルなものについてはもはやわからない）を持参してきたわけで、すぐにニューメキシコの守護聖母と認定され信仰されるに至ったというわけだ。

エル・パソへの逃避

一六八〇年八月十日、かねがねスペイン人の横暴で差別的な態度に不満をつのらせてきた先住民達はいいに蜂起する。スペイン人達は秘密裏に十分な準備を重ねてきた計画的な先住民の攻撃の前にほとんどなすすべもなかった。この時期にニューメキシコ全域に住んでいた非先住民系の新規移住者は総数（女、子供、奴隷を含む）約二千九百人で、その内約三分の二がリオ・アリーバ地域、すなわち現在のアルバカーキ市から北のリオ・グランデ川流域に住んでいた。このうち四百人以上が一週間以内に殺害されたという。三十三のミッションに分散していた修道士のうち二十一人が殺害され、ミッションも焼き打ちされた。職業兵士が駐屯していたサンタ・フェは数日間防戦でもちこたえることができたが八月十六日に水源を断ち切れ万事休した。総督アントニオ・オテルミンは交渉の末、退路を一か所だけあけてもらうことに

成功し、八月二十二日に生存者は全員サンタ・フェを退去し、南に向かった。（注18）ほとんど着のみのままでの逃亡だったが、「被昇天の聖母」像は小さく軽かったこともあり、無事持ち運び出すことができた。誰がいつどのように運び出したのかは定かでない。この逃避行にはスペイン人の植民者、聖職者のみならず反乱軍に加わらなかったために他の先住民部族からの報復を恐れた先住民グループも加わる。結局カミノ・レアルを南下してエル・パソ・デル・ノルテ（現在のメキシコ領フアレス市で同名のテキサス州エル・パソとは位置が違う）まで避難する。「被昇天の聖母」像は、このエル・パソ・デル・ノルテの北東部にあったガダルーベ・ミッション地区に落ち着いたグループと共にこのミッションに安置され、数年の間にこのミッション内にサン・ロレンソ礼拝堂を建立し、そこに安置された。エル・パソ時代の記録はあまりなくまたそれはドドラマティックなものでもなかったようだ。唯一逃避行以来この聖母像は既婚女性や子女によって管理されるようになったというのが唯一のエピソードである。

デ・バルガスの再征服と聖母の帰還（注19）

サンタ・フェの放棄はスペイン人のプライドをいたく傷つけた。一六八一年には早速一四六人の兵士による討

伐隊が編成され進攻したが敗北に終わる。以後一六九一年までに民間の義勇軍を含め数回、サンタ・フェの奪回が試みられたがどれも不成功だった。この時期のヌエバ・

エスパニーヤの一番大きな課題はカナダから南下し、ルイジアナからさらに南のテキサス占領をねらうフランス軍からいかに領土を守るかにあり、そのためまとまった数の兵士をニューメキシコに差し向ける余裕はなかった。またプエブロの反乱がヌエバ・エスパニーヤ全域に拡がる危険もなく、時間が経てば強固な部族連合組織も分裂

するだろうという読みもあった。ニューメキシコの再征服は一六八八年になってようやく真剣に考えられるようになった。メキシコ市でデイエゴ・デ・バルガスが総司令官に任命され、再征服が成功すれば総督の地位と軍の總統括権が与えられるという条件でデ・バルガスは私費も供出して兵隊の募集と物資の調達を行った。こうしてデ・バルカス率いる部隊が一六九一年にエル・パソ・デル・ノルテに到着する。そこで先住民のカリスマ的リーダーであったポベという預言者が死亡し同盟関係は崩壊していること、先住民の伝令速度は早く、従来のような進軍速度では相手に準備する十分な時間を与えてしまうことなど状況を把握した。一六九三年十月四日にエル・パソを出発するとほとんど不眠不休のペースで一挙に三週間程でサンタ・フェに到着し、水源を断ち切った後に

交渉に入った。そして年末までには無血でサンタ・フェを奪回し、占領されていた総督の館にまたスペイン国旗を掲げることができた。

エル・パソを出発する時、デ・バルガスは自分の信仰するロサリオの聖母に対して誓いを立てたという。もし短期間に勝利を得ることができれば、必ずロサリオの聖母のための礼拝堂を建てること、また一年を通じて感謝のためのプロセッションを實行する、という誓いだった。しかし遠征期間を通じて同行し兵士たちへの加護を保証するロサリオの聖母の絵画なり彫像がエル・パソにはなかったため、部下たちはかつてサンタ・フェの守護聖母であり、無傷のままサン・ロレンソ礼拝堂に安置されていた「被昇天の聖母」像をロサリオの聖母に見たてて運ぶことにした。デ・バルガスの願いが通じ短期間にしかもほとんど無血でサンタ・フェ奪還に成功したため、一六九三年一月十二日のニューメキシコ総督司令官着任演説の中で、神の国、すなわち教会堂を建設すること、この勝利をもたらした聖母をニューメキシコ全体の守護聖母とし、その名称を「征服の聖母」(*Nuestra Señora de la Conquistadora*)とすることを宣言した。この時点で聖母像は総督の館に安置されていたが、デ・バルガスはニューメキシコ最古の教区教会堂として親しまれたがプエブロの反乱で崩壊したサン・ミゲル教会堂の再建、

またこれも焼失した被昇天の聖母教会堂を新たに聖フラシスコ教区教会堂として再建することを指示し、さらにサンタ・フェ攻略の際にスペイン軍野営地とした、再征服以前からサンタ・フェ住民の共同墓地として使った場所（ここは現在までも墓地として使用されている）に新たにロサリオの聖母の礼拝堂を私費で建設する計画を同時に推し進めた。デ・バルガスにとってその出自がどのようなものであれ、彼にとつてこの聖母像はロサリオの聖母としてしか認められなかったのである。そしてその意志がサンタ・フェの再征服に参加した兵士全員の意志でもあったのだ。そしてさらにサンタ・フェの再植民者のみならずヌエバ・エスパーニャ領全体にその偉業を記憶させがたいためにラ・コンキスタドーラと改名したわけだ。ここでラ・コンキスタドーラはまたスペインのサンチアゴのイメージとも重なり合う。

サンチアゴとはイエス・キリストの弟子でキリスト教布教のために初めてイベリア半島にやってきた聖ヤコブの別称である。この聖ヤコブは紀元四十四年にエルサレムでローマ兵に処刑されたが、遺骸は生前の布教活動で縁の深かったイベリア半島に船で運ばれた。しかしその後のことは謎につつまれていた。その遺骸の埋葬地がガリシア地方の海岸で発見されたというのは九世紀のことで、以後聖ヤコブはサンチアゴと呼ばれるようになり

スペインのキリスト教徒達の守護聖人となった。サンチアゴは九世紀以来十五世紀末まで続くイスラム教徒の占領するイベリア半島の土地の再征服で体験した数々の戦闘場面で必ず先頭に立ち、キリスト教徒軍を勝利に導いた。兵士は突撃の際にサンチアゴの名を必ず叫んだという。このためサンチアゴの正式名はサンチアゴ・デ・マタモロス、すなわち「ムーア人殺しのサンチアゴ」というわけである。サンチアゴはまた新大陸における異教徒、すなわち先住民との戦いの場でもスペイン人を勝利に導く聖人として現れた。従つて新大陸ではサンチアゴ・デ・マティンデイオス（インデイオ殺しのサンチアゴ）としてあがめられたのである。（注20）

しかしやがて先住民もキリスト教信仰に同化し、メステイソンという混血人種の数も増え、またラテンアメリカ生まれのスペイン人、すなわちクリオーリオの割合も増えるに連れ、サンチアゴは、人種や階級の枠を越えて、すべての悪や不正に対して戦う被抑圧者の守護聖人というより普遍的な性格を持つに至った。ラ・コンキスタドーラも同様に、デ・バルガスの時代の発想では「悪い」先住民を討伐するスペイン人に勝利をもたらす守護聖母であったが、スペイン人自身のクリオーリオ化やメステイソ化が進行し、また先住民の信者の数も増えるにつれ、あらゆる悪や不正を打破し勝ち、「愛」による勝利をも

たらず聖母という普遍的な属性を持つものにと変身していった。さらに十九世紀になると新しい市場や資源、そして開拓地を求めて西進し、略奪やリンチ、虐殺を繰り返し、隸属と同化を迫る横暴なアングロ系白人に対して戦うネイティブ（この場合は先住民のみならずヒスパニック系住民、そして様々な混血人種もこの定義に含まれる）の守護聖母となり、また先住民やヒスパニック伝統文化の総体を象徴するシンボルにまで昇華した。そして二〇世紀の後半になり、もはやアングロ、プロテスタントとの対立も非現実的になり双方の間で共生の道が模索され、アメリカ合衆国が多文化、多民族の共存という壮大な社会的実験の場へと変貌してゆくことが明らかになってきた過程で、再びラ・コンキスタドーラはさらに人類普遍に適用される「愛」のシンボルへと再解釈されるに至った。一九九二年以来ラ・コンキスタドーラはラ・パス、すなわち「平和の聖母」にと変身したのである。（図三）

ロサリオの礼拝堂とプロセッション（注21）

現在「平和の聖母」（ラ・コンキスタドーラ）は石造の聖フランシス大聖堂の主祭壇北側に設けられたそこだけがアドベ造りの礼拝堂に安置されている。まずこの建造物の歴史だが、一六九三年のデ・バルガスの宣言にもかかわらず資金不足から破壊されたパロッキアの建設は

なかなか具体化しなかった。一六九七年にデ・バルガスの後継者であるペドロ・ロドリゲス・クペロが総督に赴任するとようやくフランシスコ修道会のために修道院と付属教会堂を再建する話がまとまった。建設にはクペロがかなりの私財を投入する約束で、一七一三年に再建事業が始まったが、この時すでにラ・コンキスタドーラ専用の礼拝堂も設計図に入っていた。しかし一七七六年のドミンゲス報告書では一七四二年頃この礼拝堂は再び破壊されて存在していないことになっている。紙幅の都合で細かなエピソードは省略するが、またこの礼拝堂が再建されたのは一七九六年である。さらにパロッキア全体が完成したのは一八〇六年前後のことであった。そして一八一二年には当時の総督ペドロ・パウティスタ・ピニョの提案で司教座を置く大聖堂（カテドラル）化が提案された後、一八五〇年には国境の変更に伴いニューメキシコ司教区が独立したのを契機にはれて大聖堂に昇格した。現在の疑似ゴシック風石造建築は初代司教ラミールの手で一八八四年までに改修されたものだが、ラ・コンキスタドーラ礼拝堂部分だけはそれ以前の十八世紀のデザインを踏襲している。さてデ・バルガスの再征服以来、ラ・コンキスタドーラはロサリオの聖母という属性も維持されるに至ったことはすでに述べたが、そのためすでに「プエブロの反乱」以前から設置されていたパロッキア

（現在の聖フランシス大聖堂）の礼拝堂再建が進められていた一方で、別にロサリオの聖母礼拝堂も進められた。その場所はおつてデ・バルガスとその一行がサンタ・フェ攻略の際に野営地とし、先住民との和平協定を結んだ前述（12頁）の共同墓地敷地内である。この場所が選ばれたエピソードとしては、進軍するデ・バルガスの一行がこの場所に到達すると突然運んできた聖母が重くなり、ついには兵士全員が協力しても支え切れず動けなくなつたという話がある。そこでそこに聖母像を置き、翌日サンタ・フェを攻めたらば勝利を収めたということだつた。ロサリオ礼拝堂の建設は一六九三年に開始されたといふことだが、しかし現在の建造物の歴史は一八〇六年にはじまるもので、それ以前にどのような礼拝堂があつたのかは不明である。しかしこの現在のロサリオの礼拝堂がある場所とそこから約二キロ離れたパロッキアの間で聖母像を担いで往復するプロセッションが定期的に実施されるようになったのはデ・バルガスの総督赴任翌年からなので、十七世紀にはかなりきちんとしたロサリオの聖母専用の礼拝堂が建立されていたと見る方が自然であるのだが詳細は今の所わからない。このプロセッションは現在ではサンタ・フェ・フイエスタの主行事というだけでなく、サンタ・フェで実施される年間行事の中でも最も歴史が古く、もつとも格の高いものになっている。

一七一二年に書かれたトーマス・E・チャベルの記録ではプロセッションのルートにはデスカンソスと呼ばれる臨時の台座と祈りを捧げるための板が置かれた休憩所があちこちに設置され、またプロセッションのルート沿いには線を引くようにはこ草、麦わら菊、それにスプロースなど常緑樹の枝が敷かれたという。また十七世紀の伝統として聖母を運ぶのはラ・コンキスタドーラ信心会に属する女性の役割だったが、この時代にはすでにそれがデ・バルガスの部隊に加わつた兵士かその家系にある男性の役となっている、といった興味深い記述もある。

「無原罪のお宿りの聖母」から「被昇天の聖母」、「ロサリオの聖母」、「ラ・コンキスタドーラ」、そして現在では「平和の聖母」と属性を変えていったこの聖母像への興味は当分尽きない。

注

- 1) 新大陸における16世紀の教会組織の動向については、Ricard, Robert, *Conquête Spirituelle du Mexique*, 1933, tr. by Byrd Simpson, Lesley, *The Spiritual Conquest of Mexico*, University of California Press, 1966, 教会組織と宗教建築の関係については McAndrew, John, *The Open-Air Churches of Sixteenth Century Mexico*, Harvard University Press, 1965. Kubler, George, *Mexican Architecture of the Sixteenth Century*, Yale University Press, 1948、等を参照。ニューメキシコにおける聖フランシスコ修道会のミッション建設活動については Forrest, Earle R., *Missions and Pueblos of the Old Southwest*, Rio Grande Press, 1990, Treib, Marc, *Sanctuaries of Spanish New Mexico*, University of California Press, 1993, および Kubler, George, *The Religious Architecture of New Mexico in the Colonial Period and Since the American Occupation*, Taylor Museum of the Colorado Springs Fine Arts Center, 1940, 等を参照。
- 2) このパラグラフの記述にあたっては Espinosa, J. Manuel, *The Pueblo Indian Revolt of 1696 and the Franciscan Missions in New Mexico*, University of Oklahoma Press, 1988, pp.14-19 を参照。
- 3) Knaut, Andrew L., *The Pueblo Revolt of 1680*, University of Oklahoma Press, 1995, pp.152-170 を参照。ただし Knaut は先住民側の立場から記述しており、文体は筆者のものと違うニュアンスで記述している。
- 4) Domínguez, Fray Francisco Atanasio, tr. by Adams, Eleanor, & Chávez, Fray Angélico, *The Missions of New Mexico, 1776*, University of New Mexico Press, 1956, pp.328-340. 聖フランシスコ修道会保管所蔵文献の概要については Chávez, Fray Angélico, *Archives of the Archdiocese of Santa Fe, 1678-1900*, Academy of American Franciscan History, 1957 を参照。
- 5) Alonso de Benavides のニューメキシコにおける活動について言及した文献は数多い。ここでは Weigle, Marta, *Brothers of Light, Brothers of Blood*, Ancient City Press, 1976, pp.11-12, の記述を参照。
- 6) Knaut, A. L. 前掲書、p.122, p.124, p.125, 及び p.128 を参照。原典は Scholes, France V., *The Supply Service of New Mexico Missions*

- in the Seventeenth Century, *New Mexico Historical Review*, vol. 5, No.1, 1930, pp.93-115 の論文
- 7) Benavides, Fray Alonso de, *Revised Memorial of 1634*, edited by Webb Hodge, Frederick, Hommond, George P., and Rey, Agapito, University of New Mexico Press, 1945. 1630年の最初の報告書は Benavides' Memorial of 1630として同編集チームで出版されているが筆者は本原稿執筆までに入手できなかった。但し、1630年版との内容比較検討と言う意味では1634年版の訳注や解説が十分参考になった。
- 8) Dickey, Roland F., *New Mexico Village Arts*, University of New Mexico Press, 1970 (第三版)、pp. 19-22, p.71, p.126, pp.152-157の記述で確認。
- 9) 聖フランシス大聖堂配布の公式ガイド用パンフレット、レターサイズ1枚のもの。
- 10) この点については Chávez, F. A., *La Conquistadora, the Autobiography of an Ancient Statue*, Paterson Press, 1954, を検討した Boyd, E., *Popular Arts of Spanish-New Mexico*, Museum of New Mexico Press, 1974の記述 p.240, p.331から著者がさらに類推したもの。
- 11) Cash, Marie Romero, *Built of Earth and Song*, Red Crane Books, 1993, pp.20-21
- 12) Boyd, E., 前提書, p.240.
- 13) 内容からして Chávez, 前提書、及び *La Conquistadora is a Paisana*, *El Palacio*, 57, No.10, 1948、あたりからの抜粋編集と思われる。
- 14) 統計については knaut, 前提書、P.132を参照。ちなみにニューメキシコに現存する最古の国勢調査記録（原典）は1750年からのもの。ニューメキシコにおける探検や布教、植民地活動の報告書類はJameson, J. Frankin.ed., *Original Narratives of Early American History. Spanish Exploration in the Southwest:1542-1706*. American Historical Association. 1916. に英訳の上まとめられている。
- 15) Boyd. E., 前提書、p. 8の注より。
- 16) 様々な聖母の図像表現については柳宗玄、中森義宗編、キリスト教美版図典、吉川弘文館、1990、中森義宗編、キリスト教図像辞典、近藤出版社、1979、キリスト教大辞典、教文館、1985等を参照。

- 17) レディー・イン・ブルーの伝説に関する記述は様々な文献に登場する。筆者が主として参照したのは Weigle, Marta, and White, Peter, *The Lore of New Mexico*, University of New Mexico Press, 1988. pp.315-317. 及び Weber, David J., *The Spanish Frontier in North America*, Yale University Press, 1992. しかしルイサ・デ・カリオンとマリア・デ・ヘスース・デ・アクレグ信仰の関連性について述べたものはないようだ。
- 18) プエブロの反乱の全体像、攻防の歴史については Knaut, 前掲書や Espinosa, 前掲書にまとめられている。
- 19) ニューメキシコの歴史を扱う文献のほとんどがテ・バルガスの再征服の記述に頁を割いている。ロサリオの聖母信仰と関連づけた典型的な説が Weigle & White の著書、前掲書、pp.317や、Boyd, E. 前掲書、p.330-332で紹介されているが、Forrest. 前掲書、pp.53-54 は異説も紹介している。
- 20) サンチアゴ伝説についてはすでに拙著、メキシコ美術紀行、新潮社、1984. pp.140-142、で紹介している。
- 21) ロサリオの礼拝堂建設やプロセッションの起源、現在に至るまでのロサリオ聖母信仰に関する文献も膨大な数があり、本稿で参照した文献のほとんどで扱っている。Forret, 前掲書、pp.49-54. Boyd, E., 前掲書 p.317, などを主に参照。Kessel, J.L., *The Missions of New Mexico since 1776*, p.37 など聖フランシスコ教区教会堂（パロッキア）との関連性について述べているものも多い。ラ・コンキスタドーラがローマ法王庁に正式にニューメキシコの守護聖母として承認されたのは1960年と比較的最近のことである。また信心会の名称にラ・パス（平和の）という新しい属性が加えられたのは1992年のことだが、移行期の措置として現在まではまだラ・コンキスタドーラの名称も併記されている。

